



## 報道提供資料

令和4年7月20日（水）午後3時15分

問合せ：大阪市鶴見区緑地公園 2-136  
（公財）国際花と緑の博覧会記念協会  
企画事業部長 三谷彰一  
企画事業部企画事業課係長 大栗大

<https://www.expo-cosmos.or.jp>  
090-6913-1445（7月20日のみ）  
06-6915-4513

## 2022年（第29回）コスモス国際賞の受賞者は

### フェリシア・キーシング 博士

**自然生態系の生物多様性と、人獣共通感染症病原体が人間社会へ伝播するリスクとの関係性を、実践的な調査研究によって明らかにし、ポストコロナ時代における自然と人間の共生のあり方に科学的な示唆を与えた。**

公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会（会長：御手洗富士夫）は、7月20日開催の理事会で、コスモス国際賞委員会（委員長：尾池和夫）、同選考専門委員会（委員長：白山義久）からの報告を受け、バード大学教授のフェリシア・キーシング博士（56歳）を2022年（第29回）コスモス国際賞の受賞者に決定した。

フェリシア・キーシング博士は生物多様性と人獣共通感染症病原体の伝播リスクとの関係を、実践的な調査研究により解明した。生物多様性の高い生態系はさまざまな病原体の温床となりうるが、総体としては感染症のリスクを下げうる希釈効果が存在することを示し、生物多様性が人間の社会にとって価値あるものであることを、明らかにした。

この研究業績は、生命体の相互関係を探り、ポストコロナ時代における「自然と人間との共生」の在り方に示唆を与えるものである。

なお、授賞式は、本年秋に大阪で開催する予定。



写真画像ファイルは次のURLにあります。

<https://www.expo-cosmos.or.jp/main/cosmos/2022photo.html>

## 1. 授賞の対象

花と緑に象徴される地球上のすべての生命体の相互関係およびこれらの生命体と地球との相互依存、相互作用に関し、地球的視点からその変化と多様性の中にある関係性、統合性の本質を解明しようとする研究活動や業績であって、「自然と人間との共生」という理念の形成発展に特に寄与すると認められるもの。

上記の観点から、以下の点を重視する。

- (1) 分析的、還元的な方法ではなく、包括的、統合的な方法による業績であること。
- (2) 地球的視点にたった業績であること。特定の地域や個別的現象に関するものであっても、普遍性があること。
- (3) 直接的な問題解決型ではなく、長期的な視野をもつ業績であること。

## 2. 選考の経緯

2022年4月から6月までコスモス国際賞選考専門委員会を3回開催し、174件を対象に審査した上、6月27日開催のコスモス国際賞委員会で受賞者を決定した。

<2022年コスモス国際賞の選考対象>

2019年分58件、2020年45件、2021年34件、2022年37件 合計174件 (28カ国)

<国別内訳>

日本(56)、アメリカ(41)、イギリス(14)、ドイツ(12)、オーストラリア(5)、カナダ(4)、ブラジル(4)、スペイン(3)、ベルギー(3)、韓国(3)、タイ(3)、スロバキア(2)、スイス(2)、インド(2)、インドネシア(2)、シンガポール(2)、中国(2)、オランダ(2)、チリ(2)、ケニア(2)、フィリピン(1)、イスラエル(1)、アルゼンチン(1)、アイルランド(1)、キルギス(1)、ハンガリー(1)、チュニジア(1)、南アフリカ(1)

## 3. その他

- (1) 授賞式

令和4年11月9日(水)、住友生命いずみホール(大阪市中央区)で行う。

- (2) その他

受賞者には賞状、賞牌および副賞(4,000万円)を贈呈する。

### 添付資料

- ・ 受賞者の概要
- ・ 授賞理由
- ・ 受賞者のコメント
- ・ その他(歴代受賞者、コスモス国際賞委員会委員・選考専門委員会委員名簿)

## 受賞者の概要

氏名 フェリシア・キーシング Felicia Keesing

生年月日 1966年1月24日生まれ（56歳） アメリカ・サンタクルーズ生まれ

国籍 アメリカ

現職 バード大学 教授（生物学）

### 学歴

1987年 スタンフォード大学 学士

1997年 カリフォルニア大学バークレー校 博士（統合生物学）

### 職歴

1997-2000年 シェナ大学 助教（生物学）

2000-2003年 バード大学 助教（生物学）

2003-2012年 バード大学 准教授（生物学）

2012- 現在 現職

### 主な著書

Richard S. Ostfeld, Felicia Keesing, and Valerie T. Eviner eds. 2008, *Infectious Disease Ecology: Effects of Ecosystems on Disease and of Disease on Ecosystems*, Princeton Univ Pr

## 授賞理由

フェリシア・キーシング博士は、自然生態系を構成する生物の種多様性とそこに存在する人獣共通感染症病原体が人間社会へ伝播することのリスクとの関係性を、様々なフィールドにおける調査に基づいて研究してきた生態学者である。

近年発生した新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の地球規模での感染拡大は、人類社会に未曾有の混乱をもたらし、生活や経済に莫大な影響を与えた。このような地球規模での健康上の危機を経験して、我々は、人間と野生生物との関係の在り方を根底から見直す必要があることを認識するに至ったが、博士は、自然生態系において、種多様性が減少することにより、新興感染症や再興感染症の脅威が増すことを早くから指摘してきた。

博士は、生物多様性の保全と人獣共通感染症病原体の伝播との関係を、ニューヨーク州などアメリカの北東部とアフリカのサバンナにおけるフィールド調査と室内での実験的な研究などを長期間継続することによって、病原体が種を超えて伝播する生態学的メカニズムにまで掘り下げて解明した。多様な生物種の存在する生態系は、多様な病原体の温床となり得る半面、ある病原体に感染しない生物種が多数存在することで、その病原体の生態系内での増殖と拡散が阻害され、生態系内での密度が低位に保たれる(希釈される)ことによって、人など本来の宿主以外の種の感染症のリスクが総体として下がる場合が多いことを実証的に提示した。また、自然生態系に人間が侵入すると、一般的に大型哺乳類が減少するため小型哺乳類(げっ歯目、食肉目等)の生息密度が上昇するが、これらの動物は多くの人獣感染症の宿主でもあるため、人獣感染症の人への感染率が高くなることも示した。

博士は、これまで一貫して、保全すべき生物多様性の範囲と一義的な有効性を決定する単一の普遍的方法は、存在しないと主張してきた。そのような単一の解を求めるのではなく、さまざまな要因の複雑な関係、すなわち感染メカニズム、生息地の特徴、病原体の生態学的親和性等を綿密に調査することによって、はじめてそれぞれの地域に適した、「生物多様性の保全がなぜ必要なのか」という問いに対する新たな視点と科学的厳密性に基づく解決策を見出すことができるというのが博士の見解である。

また、博士は専門家のみならず、非専門家であっても研究成果の論文やデータに容易にアクセスすることができる「オープンサイエンス」の推進者としての活動を活発に行っている他、同僚研究者らとネットワークを形成し、中学・高校から大学の学部生、大学院生に至るまでの若い研究者たちへの教育にも努めている。博士による学生や一般市民等とのこれらの関わりは、社会的にも重要な意味を持つものである。

博士の一連の研究成果は、すべての生命体の相互関係を解明しようとするコスモス国際賞の趣旨に合致すると共に、生態学・公衆衛生学に亘る学際的なアプローチは、今後の「自然と人間との共生」の航路を探るうえで、極めて意義深く、ポスト COVID-19 時代に必要な「ニューノーマル」の確立にも深く示唆を与えるものと思われる。

以上のことから、フェリシア・キーシング博士の業績はコスモス国際賞の授賞に相応しいと評価した。

## 受賞者コメント

2022年コスモス国際賞を受賞し、たいへん光栄に存じます。本賞の目的および国際花と緑の博覧会記念協会の活動は「自然と人間との共生」に焦点を当てています。これは何よりも重要なテーマであると言えます。

色々な意味で、私が本賞の受賞者になれるとは思っていませんでした。私が生物学の研究を始めたのは比較的遅い時期からで、大学院に進学後も研究者として生きていこうとは考えていませんでした。さらに私は、大きな大学でなく小さな大学でキャリアを積んできました。しかし、このような通例とは異なる経験は、大きなメリットでもありました。学部生の皆さんと緊密に働くことが、常に私のインスピレーションの源となっています。おそらく一番大切なこととして、私の生徒や子どもたちが、彼らが受け継ごうとしている世界の現実に取り組んでいるのを目にする時、私たちが今行う選択が大きく問われているのだと強く感じます。

私が初めて本当の意味で科学研究に没頭するようになったのは、ケニアのサバンナで調査を行った時のことでした。この研究では、シマウマ、ゾウ、キリンなどのカリスマ的な大型哺乳類がいなくなると、サバンナがどう機能するのかを調べました。その結果、大型哺乳類の不在によって、げっ歯類のような小型哺乳類の数が膨れ上がり、他の影響も生じることが判明しました。例えば、増加したげっ歯類はアカシアの幼木の一群全体を食い尽くし、砂漠化をもたらす可能性があります。また、げっ歯類は毒ヘビを引き寄せ、人間に病気を感染させるノミの宿主となります。この研究を通して、サバンナに住む人々が大型哺乳類から受けている恩恵のいくつかを確認しました。それ以来、私はケニアとアメリカの協力者と連携して、人間と家畜および野生生物が同じ場所に暮らす際に得られる環境・経済・社会的な恩恵を明らかにしてきました。

合衆国において、私は同僚研究者らと一緒に、病原体—とりわけ人間の病気の原因となる病原体の出現と伝播に対して、生物多様性がどう影響するかについて研究を進めてきました。私たちはライム病に関する調査も行いました。これは世界各地でよく見られる疾病で、ベクター（感染症を媒介する生物）を介し人間に感染します。この研究により、ライム病原菌を媒介するマダニが生物多様性の高い生息地から来ている場合には、危険性が低い傾向にあることが示されました。生物多様性が減少すると、マダニが最も寄生しやすい動物が繁殖するからです。つまり、多様な生物種が存在する自然環境は、多様性が低い場合に増殖する危険な種の影響が希釈されるため、人間を感染から守っているということです。現在では、このような希釈効果は、多くの人間・野生生物・植物の病気に関して生じていることが知られています。生物多様性の保全を行うことで、希釈効果による具体的で直接的な恩恵が得られるのです。

この数年、人類が新型コロナウイルス感染症のパンデミック（世界的大流行）との闘いを続ける中、生物多様性と病気の関連がかつてないほど重要視されるようになりました。私たちが何十年もかけて築いてきた世界—人間の居住地が支配的で自然環境があまり残されていない世界—はまた、人間を病原体から守ってくれる可能性が最も高い種が絶滅に向かっている一方で、人間に病原体をうつす可能性が最も高い種が急増している世界でもあるのです。私の母国では、マスクやワクチンや治療についての誤った情報が、私たちの感染症予防力のみならず、まさに社会・市民機構をも破綻させる様子を目の当たりにしてきました。このような市民関与と科学の関連を認識し、私はバード大学の同僚たちと、主に大学生に科学的リテラシーを教えるための新たな方法の開発を、他に先駆けて進めています。これは大きな挑戦です。

楽観的な面として、パンデミックの最初の数カ月で、必要に迫られれば、私たちには容易に行動を改めることが可能であり、どれほど多くのイノベーションをどれほど早く起こすことができるかがわかりました。このことを忘れないようにしたいと思います。このたびはコスモス国際賞を授けていただき、深く感謝いたします。本賞の趣旨に沿いながら、今後も研究者としてのキャリアを重ねてまいります。

(参考資料)

## コスモス国際賞歴代受賞者（肩書きは受賞時）

「コスモス国際賞」は、「自然と人間との共生」という理念の発展に貢献し、「地球生命学」とも呼ぶべき、地球的視点における生命相互の関係性、統合性の本質を解明しようとする研究活動や学術活動を顕彰するために設けられた国際賞です。

### 1993年（第1回）受賞者

ギリアン・フランス卿

イギリス 王立キュー植物園園長

南米アマゾン地域を中心とする熱帯植物研究の権威。地球全域の植生を統一データ化する「地球植物誌計画」を提唱、世界の植物学者とネットワークを組んで実現に努力した。

### 1994年（第2回）受賞者

ジャック・フランソワ・バロー博士（物故者）

フランス パリ国立自然史博物館教授

太平洋の島々の自然と人々の暮らしについて民族生物学的な調査、研究を行い、これをもとに人間と食糧をテーマに、全地球的な視点からユニークな考察を発表した。

### 1995年（第3回）受賞者

吉良龍夫博士（物故者）

日本 大阪市立大学名誉教授

光合成による植物の有機物生産の定量的研究をもとに、生態学の新分野となる生産生態学を確立。東南アジア地域の熱帯林生態系の研究で指導的な役割を努めた。

### 1996年（第4回）受賞者

ジョージ・ビールズ・シャラー博士

アメリカ 野生生物保護協会科学部長

40年にわたり、世界各地で様々な野生生物の生態と行動を研究。『マウンテンゴリラ・生態と行動』『ラストパンダ』など数多くの著書で全世界に野生動物の実態を知らせた。

### 1997年（第5回）受賞者

リチャード・ドーキンス博士

イギリス オックスフォード大学教授

1976年に出版された著書『利己的な遺伝子』で、生物学の常識を覆す大胆な仮説を発表。その後も、生物の進化について新しい見解を提示して、学会に論争を起こしている。

### 1998年（第6回）受賞者

ジャレド・メイスン・ダイヤモンド博士

アメリカ カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授

医学部教授として生理学を研究する一方、40年にわたりニューギニアの熱帯調査を行い、これらを基に人類の歴史的な発展を再構成したユニークな考察を発表した。

### 1999年（第7回）受賞者

呉征鎰（ウー・チェン・イー）博士（物故者）

中国 中国科学院昆明植物研究所教授・名誉所長

中国を代表する植物学者。中国を拠点に東アジア地域の植物の調査研究に取り組み、中国全土の植物の種の多様性を網羅する『中国植物誌』の編集を主導、刊行を実現させた。

#### 2000年（第8回）受賞者

デービッド・アッテンボロー卿

イギリス 映像プロデューサー、自然誌学者

野生生物のドキュメント映像のパイオニア。BBC時代から退社後を含め、約半世紀にわたって、地球上の野生の動植物の生の姿を、優れた映像で全世界に伝えた。

#### 2001年（第9回）受賞者

アン・ウィストン・スパーン教授

アメリカ マサチューセッツ工科大学教授

都市と自然は対立するものでなく、周辺の地域環境と調和し、その一部として存在する都市の構築が可能であるとし、都市が自然との調和をはかりながら発展する方策を示した。

#### 2002年（第10回）受賞者

チャールズ・ダーウィン研究所

エクアドル・ガラパゴス諸島

1964年設立の国際的 NGO・NPO 組織。南米エクアドル領のガラパゴス諸島で、ゾウガメ、イグアナなど、特異な固有生物の調査研究と保護に当たっている。

#### 2003年（第11回）受賞者

ピーター・ハミルトン・レーブン博士

アメリカ ミズーリ植物園園長

米国を代表する植物学者で、地球の生物多様性の保全を提唱した国際的な先駆者。常に地球的な視点で生命の問題を考え、学術と実践両面で自然と人間との共生に貢献した。

#### 2004年（第12回）受賞者

フリーヤ・カラビアス・リジョ教授

メキシコ メキシコ国立自治大学教授

途上国の立場から全地球的な環境問題を考え、フィールドワークとさまざまな学問分野の研究を統合したプログラムを実施し、異なる条件下での困難な課題に優れた成果を挙げた。

#### 2005年（第13回）受賞者

ダニエル・ポーリー博士

カナダ プリティッシュ・コロンビア大学水産資源研究所所長・教授

漁業と海洋生態系の関連を包括的に研究。海洋生態系保全と水産資源の持続的利用を可能にする科学的モデル開発など、海洋生態系と資源研究の分野で優れた業績を収めた。

#### 2006年（第14回）受賞者

ラマン・スクマール博士

インド インド科学研究所 生態学センター・教授

ゾウと人間との生態関係や軋轢への対処をテーマとした研究から、生物多様性保護と自然環境の保全全般にわたる多くの提言を行い、かつ実行し、野生生物と人間との共存という分野での先駆的な取り組みを行なった。

#### 2007年（第15回）受賞者

ジョージナ・メアリー・メイス博士（物故者）

イギリス ロンドン大学自然環境調査会議個体群生物学研究センター所長兼教授

絶滅危惧種を特定・分類し、科学的な基準を作成することにおいて指導的役割を果たし、種の保全、生物多様性保全に大きく貢献する取り組みを行なった。

#### 2008年（第16回）受賞者

ファン・グエン・ホン博士

ベトナム ハノイ教育大学名誉教授

戦争や乱開発がマングローブの生態系に壊滅的な打撃を与えたベトナムで、マングローブの科学的、包括的な調査・研究を行い、マングローブ林の再生に大きな成果をあげた。

#### 2009年（第17回）受賞者

グレッチェン・カーラ・デイリー博士

アメリカ スタンフォード大学教授

人類社会が依存する生物多様性のもつ「生態系サービス」の価値を包括的に捉えて、「国連ミレニアム生態系評価」など国際的な取り組みに貢献するとともに、生態学・経済学を統合し、自然資本の持続的な利用のために「自然資本プロジェクト」を実施する等大きな役割を果たした。

#### 2010年（第18回）受賞者

エステラ・ベルグレ・レオポルド博士

アメリカ ワシントン大学名誉教授

父アルド・レオポルド氏（1887-1948）が提唱した「土地倫理」を継承・追及するとともに、アメリカ各地においてこの考えを広げるなど、多大な功績を残した。

#### 2011年（第19回）受賞者

海洋生物センサス科学推進委員会

事務局：アメリカ ワシントンDC

海洋生物の多様性、分布、生息数についての過去から現在にわたる変化を調査・解析し、そのデータを海洋生物地理学情報システムという統合的データベースに集積することにより、海洋生物の将来を予測するプロジェクト「海洋生物センサス」を主導した。

#### 2012年（第20回）受賞者

エドワード・オズボーン・ウィルソン博士（物故者）

アメリカ ハーバード大学名誉教授

アリの自然史および行動生物学の研究分野で卓越した研究業績をあげ、その科学的知見を活かして人間の起源、人間の本性、人間の相互作用の研究に努めたほか、生物多様性保全や環境教育を推進する実践家として活動した。

#### 2013年（第21回）受賞者

ロバート・トリート・ペイン博士（物故者）

アメリカ ワシントン大学名誉教授

生物群集の安定的な維持に捕食者の存在が不可欠なことを、明快な野外実験によって示し、キーストーン種という概念を提唱した。一連の研究は、生物多様性を扱う群集生態学の分野に新しい視点をもたらし、生態学はもとより保全生物学や、一般の人々の生物多様性への理解に大きな影響を与えた。

#### 2014年（第22回）受賞者

フィリップ・デスコラ博士

フランス コレージュ・ド・フランス教授

人類学者として、南米アマゾンに住む先住民アシュアールの人々の自然観とそこの自然と関わる諸活動に焦点を当て、これらの綿密な調査から哲学的な思想へと論を進め、自然と文化を統合的に捉える「自然の人類学」を提唱した。



### 2015年（第23回）受賞者

ヨハン・ロックストローム博士

スウェーデン スtockホルム・レジリエンス・センター所長

人類が地球システムに与えている圧力が飽和状態に達した時に不可逆的で大きな変化が起こりうるとし、プラネタリーバウンダリーを把握することで、壊滅的な変化を回避でき、その限界がどこにあるかを知ることが重要であるという考え方を示した。

### 2016年（第24回）受賞者

岩槻 邦男博士

日本 東京大学名誉教授

生物多様性を探求し、伝統的な手法に加えて、分子系統的な手法も取り入れつつ、包括的かつ多面的に植物系統分類学を発展させた。また、系統分類学を含めた多様性生物学による生物の統合的理解の重要性を説き、そのような理解が生物の豊かさや自然との共生を支える重要な原理であることを明らかにした。

### 2017年（第25回）受賞者

ジェーン・グドール博士

イギリス ジェーン・グドール・インスティテュート創設者

1960年から、野生チンパンジーの研究を続け、その全体像を明らかにするとともに、チンパンジーが住む森を保全するための植林活動や環境教育活動を行った。博士が創案した青少年が担い手となる環境教育プログラム「ルーツアンドシューツ」は99カ国で約15万団体が、その活動を展開している。

### 2018年（第26回）受賞者

オギュスタン・ベルク博士

フランス フランス国立社会科学高等研究院教授

和辻哲郎の著作「風土」から大きな影響を受け、風土概念をさらに拡充、深化、発展させ、「風土学 (mésologie)」と名づけられる新たな学問領域を切り拓き、自然にも主体性があるという「自然の主体性論」を提唱した。

### 2019年（第27回）受賞者

スチュアート・L・ピム教授

アメリカ デューク大学教授（保全生態学）

地球上の生物の食物網の複雑さや種の絶滅速度等についての理論を提唱し、地球規模の生物多様性に関する政策などに大きな影響を与えると共に、生物保全活動を実践する団体を支援するNGOを設立するなど、生態系や生物多様性の保全に対して、科学と実践の両面において多大な功績を収めた。

### 2021年（第28回）受賞者

ピーター・ベルウッド博士

オーストラリア オーストラリア国立大学名誉教授

考古学、言語学、人類生物学の学際的研究による「初期農耕拡散仮説」を提唱し、農耕の起源と初期農耕民の移動・拡散過程を明らかにするとともに、この研究を通して、自然と人間との共生の歴史を統合的な視点から探求した。

## 2022年コスモス国際賞 賞委員会委員および顧問

## International Cosmos Prize Committee

2022.4 (五十音順)

役職 Position	氏名 Name	専門分野 Specialty	職名 Official Title
委員長 Chairperson	尾池 和夫 Dr. OIKE Kazuo	地球科学 Geoscience	静岡県立大学 理事長 President, University of Shizuoka
副委員長 Vice Chairperson	山極 壽一 Dr. YAMAGIWA Juichi	人類学、霊長類学 Anthropology, Primateology	総合地球環境学研究所 所長 Director General, Research Institute for Humanity and Nature
委員 Member	秋道 智彌 Dr. AKIMICHI Tomoya	生態人類学 Ecological anthropology, Ethno-biology	山梨県立富士山世界遺産センター 所長 Director General, Fujisan World Heritage Center
委員 Member	浅島 誠 Dr. ASASHIMA Makoto	発生生物学 Developmental biology	帝京大学 特任教授 Research Professor, Teikyo University
委員 Member	池内 了 Dr. IKEUCHI Satoru	天文学 Astronomy	総合研究大学院大学 名誉教授 Professor Emeritus, The Graduate University for Advanced Studies
委員 Member (選考委員長兼務)	白山 義久 Dr. SHIRAYAMA Yoshihisa	海洋生物学 Marine biology	京都大学 名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University
委員 Member	武内 和彦 Dr. TAKEUCHI Kazuhiko	緑地環境科学 Landscape and environmental science	公益財団法人地球環境戦略研究機関 理事長 President, Institute for Global Environmental Strategies
委員 Member	中西 友子 Dr. NAKANISHI Tomoko	放射線植物生理学 Radioplant physiology	星薬科大学 学長 President, Hoshi University
委員 Member	西澤 直子 Dr. NISHIZAWA Naoko	植物分子生物学 Plant molecular biology	石川県立大学 学長 President, Ishikawa Prefectural University
委員 Member	林 良博 Dr. HAYASHI Yoshihiro	動物資源科学 Animal science and resource	東京大学 名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
委員 Member	鷺谷 いづみ Dr. WASHITANI Izumi	生態学・保全生態学 Ecology, Conservation ecology	東京大学 名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
委員 Member	和田 英太郎 Dr. WADA Eitaro	生物地球科学 Biogeochemistry	京都大学 名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University

2022.4 (五十音順)

役職 Position	氏名 Name	専門分野 Specialty	職名 Official Title
顧問 Advisor	岩槻 邦男 Dr. IWATSUKI Kunio	植物分類学 Systematic botany	東京大学 名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
顧問 Advisor	岸本 忠三 Dr. KISHIMOTO Tadamitsu	免疫学 Immunology	大阪大学免疫学フロンティア研究センター 特任 教授 Project Professor, Immunology Frontier Research Center, Osaka University
顧問 Advisor	中村 桂子 Dr. NAKAMURA Keiko	生命科学・生命誌 Biohistory	JT 生命誌研究館 名誉館長 Honorary Director, Biohistory Research Hall

2022年コスモス国際賞 選考専門委員会委員  
International Cosmos Prize Screening Committee of Experts

2022.4 (五十音順)

役 職 Position	氏 名 Name	専門分野 Specialty	職 名 Official Title
委員長 Chairperson	白山 義久 Dr. SHIRAYAMA Yoshihisa	海洋生物学 Marine biology	京都大学 名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University
副委員長 Vice Chairperson	池谷 和信 Dr. IKEYA Kazunobu	環境人類学 Environmental anthropology	国立民族学博物館 教授 Professor, National Museum of Ethnology
委員 Member	池邊 このみ Dr. IKEBE Konomi	緑地環境科学 Landscape and Environmental science	千葉大学大学院園芸学研究科 教授 Professor, Graduate School Environmental Science and Landscape, Chiba University
委員 Member	モンテ・カセム Dr. Monte Cassim	環境科学 Environmental science	大学院大学至善館 学長 President, Graduate School of Leadership and Innovation, Shizenkan University
委員 Member	亀崎 直樹 Dr. KAMEZAKI Naoki	動物生態学 Animal ecology	岡山理科大学生物地球学部 教授 Professor, Faculty of Biosphere-Geosphere Science, Okayama University of Science
委員 Member	佐倉 統 Dr. SAKURA Osamu	科学技術社会論 Science and technology studies	東京大学大学院情報学環 教授 Professor, Interfaculty Initiative in Information Studies, The University of Tokyo
委員 Member	ケビン・ショート Dr. Kevin Short	文化人類学 Anthropology	東京情報大学環境情報学科 元教授 Former Professor, Department of Environmental Information, Tokyo University of Information Sciences
委員 Member	高村 ゆかり Ms. TAKAMURA Yukari	国際法、環境法 International law, Environmental law	東京大学未来ビジョン研究センター 教授 Professor, Institute for Future Initiatives
委員 Member	辻 篤子 Ms. TSUJI Atsuko	科学ジャーナリスト Science journalist	中部大学 特任教授 Project Professor, Chubu University
委員 Member	横山 潤 Dr. YOKOYAMA Jun	植物分類学 Systematic botany	山形大学理学部 教授 Professor, Faculty of Science, Yamagata University